

◎新型コロナウイルス禍で考える日本の行方 Vol.3

◎地域ごとの現状と地方を訪れて考えたこと

◎全国日本語学校連合会 研究員 對馬好一

11月のこの欄（第2回）で、新型コロナウイルス感染症について「日本では2回目の波が来たものの、1日の発症者は数百人程度。go to travel や、go to eat が行われて、人の交流が活発になってきましたが、欧州ほどの死亡者や重症患者の急激な増加は見られていません」と書いたとたんに、北海道や大阪で急激に感染者数が増え、「第3波」と呼べる状況になってきました。東京では1日に500人以上の感染者が出る日が続きました。

欧米に比べれば、日本の人口当たりの感染者数はまだまだ少ないのですが、テレビでは「ベッド数が緊迫状態」「医療崩壊が近い」などの報道が繰り返されています。政府も go to travel の対象地域を限定したり、go to eat のポイント利用を一時制限したりの施策を行っています。

こうした中で、私自身、11月に北海道と佐賀県に行ってきましたので、それを中心に地方の様子を紹介したいと思います。

北海道に行ったのは、11月5-8日の4日間です。雪が積もる前の紅葉がきれいな季節ですので、普段の年なら、飛行機も札幌市内のホテルもかなり混んでいる時期ですが、コロナ禍の影響か、ぎりぎりに申し込んでもすんなり予約が取れました。go to travel 適用もありましたが、その割引分を除いてもそれほど高い金額ではありませんでした。と言うことは、ビジネスマンも観光客も、普段の年に比べれば、国民が北海道を訪れるのを控えているということでしょう。同じ時期、京都の嵐山などでは前年よりも観光客が多かった日があったのとは、状況が異なっていると言えるでしょう。

嵐山を訪れた人たちは、ニュースのインタビューでは、「コロナ自粛で自宅にいるのは飽きた。戸外で日帰りなら問題ないと思って来たけれども、あまりの密にびっくりした」と言う人が多かったようです。京都なら、大阪からはもちろん、東京からでも日帰りで行ける距離ですので、そう考えた人が多かったのでしょう。それに対し、札幌はどうしても1泊か2泊しなければなりません。そのために、訪問客は減っています。ビジネスにしても、コロナ禍の中で、テレビ電話やSkype、Zoomなどの通信手段も発達したので、地方出張してライブで会議をするなどの必要性も減っているのでしょう。

JR 札幌駅からは、テレビ塔などがある観光地の大通公園や、北日本一番の繁華街のススキノ方面に地下道が続いていますが、この日は比較的暖かかったこともあり、多くの人たちが地上の歩道を歩いて移動しており、空気がこもりそうな地下道はあまり「密」になっていませんでした。

ホテルにチェックインしてテレビをつけると、鈴木直道^{なおみち}北海道知事は「道内の感染者が増えている。外出を自粛してください」と呼び掛けていました。札幌で会う予定の人に会う場所を問い合わせたところ、都心から地下鉄で1駅離れた西11丁目駅近くを指定されました。ススキノの中心からは2キロ近く離れています。翌日の会合は北18条で、同じく4キロ以上離れていました。地元の人たちも、「今はススキノに近づきたくない」と言っており、その結果、こうした郊外の場所で打ち合わせや会合を開くことになりました。

そういうところに行くと、歩いている人は少なかったのですが、飲食店はほぼ満席でした。

札幌は私が過去に2回、新聞記者として勤務した街であり、ススキノには常連だった飲食店もいくつかありましたが、今年に入り、知っている店のほとんどが閉店しました。経営していた人の1人は、「2月、3月の時点で開けていても赤字が累積するばかりなので、コロナの期間は思い切って店を閉め、おちついてから新しい店を開くことを考えたいと思った。その決断は正しかった」と言っていました。今回の出張で、ススキノの近くの店にも行きましたが、大手チェーン店は「来週から当分の間店を閉める」とか。在庫の生鮮食材の処理に頭を悩ませていました。常連客が多い小料理屋は客数を減らして飛沫防止シートを多数設置して、執拗に消毒していました。決まった人しか来ないスナックは扉を開けて営業していましたが、後で聞いたら、私が帰京してすぐ、廃業したそうです。また、私が親しかった昔の取材先の1人がコロナに感染し、入院しているという話も聞きました。

札幌、特に中心部の経済はコロナ禍の直撃を受けているといっても過言ではないでしょう。そして、ススキノなどの繁華街で感染者が増えているのも事実です。しかし、一步、郊外に出れば、気のゆるみがあるようです。

一方、佐賀は、私の長女が住んでいます。

長女は11月29日から12月3日、就学前の子供を連れて東京に来ました。私が羽田空港に車で迎えに行き、自宅に泊め、都内で出かける場合は、なるべく車で送っていき、公共交通機関は極力使わないようにしました。また、孫は昼間も私の家で預かり、ほとんど家から出さず、出る時も車から降ろさないようにしました。その結果、今回の上京ではどこにも遊びに行きませんでした。

それでも、3日に佐賀に帰る前に佐賀の保育園や、夕方や休日に子供を預かってくれる学童に電話し、「明日(4日)から通園します」と言ったところ、「東京から帰って来たばかりなので園に来ないでください」と言われたそうです。東京での生活ぶりを説明しましたが、受け入れてもらえません。「東京に行った、すなわち、ウイルスに汚染されている可能性が高い」と言うことです。これでは、娘は佐賀に帰っても仕事に行けません。外国への渡航では意識することですが、国内でも同じだったのです。頭ではわかっているけど、東京にいては感覚的に理解できていなかったのが大変に驚きました。

実は、私は5月に佐賀に行く予定でしたが、コロナ禍による都市間移動自粛で行くのを諦めました。また、夏には娘が孫を連れて東京に来る予定でした。「佐賀に帰ってきてから

2週間は自分も息子も自宅隔離する」と言ったものの、勤務先や保育園の複数の関係者から「なんでそんな危険な東京に行くのですか。行かないわけにいかないのですか」と言われて上京を断念したそうです。東京と佐賀の間で自由な往来ができないのです。

10月には、第2波もある程度おさまったので、私が2泊で佐賀に行きました。うち1泊は嬉野温泉の旅館に泊まりました。予約したときは、「コロナのおかげですいています」と言う話でしたが、実際に泊った時は、ほぼ満館状態でした。テレビや新聞では連日、各県の発症者数を報道していましたが、佐賀県はほぼ毎日「0」が続いていました。そのために、県外の人が安心して旅行に来ていたようです。

そして11月、18日に突然思い立って再び佐賀に行きました。羽田空港に行き、予約なしで福岡行の飛行機にすぐ乗れました。約1週間、娘の家に滞在し、外食もしましたが、どの店も「お客さんの数は通常とあまり変わらない」と言っていました。でも、友人や親戚には佐賀に来ていることは伝えず、娘の家から出るときは自家用車で移動するように努めました。25日に福岡空港から帰京しましたが、出発便の表示を見ると「欠航」がたくさん並んでいました。手荷物検査もガラガラでした。

北海道でも佐賀県でも、ほとんどの大人がマスクをつけて生活しています。しかし、大いに違うのは、札幌では子供を含めて東京と同じように厳しい感染対策をしているのに対し、感染者数が少ない佐賀では、子供はほとんどマスクをつけず、大人も皆、マスクはつけているものの、通常通りの生活をしているということです。

その佐賀では、東京など、発症者数が多い街から来る人は徹底的に敬遠され、隔離することを求められます。これは、佐賀と同じような中規模以下の地方都市には共通しています。東京や大阪にいと、マスクや手指消毒など、感染対策に気を配って通常の生活をしている人も、感染者数が少ない地域に行けば、かなり厳しい対応を迫られるという現実があります。

このように、コロナに対する考え方、生活様式は、狭い日本でも感染拡大地域と、感染者がほとんどいない地域では大きく違います。東京、大阪、神奈川や札幌市など、感染者が多い地域に住んでいる人は、地方に行く際に十分意識していないといけな問題でしょう。

そして、コロナ禍が長引けば、国民の分断につながりかねません。そういうことを起こさないように、十分に注意した施策、そして国民の意識が求められます。留学生の皆さんも、そういうことに気配りする必要に迫られるでしょう。

まもなく、新しい年を迎えます。明るい未来を築いていきたいものです。